

## 研究・調査報告書

報告書番号	担当
1 5 8	滋賀医科大学社会医学講座福祉保健医学部門
題名 (原題/訳)	
In utero alcohol exposure and prediction of alcohol disorders in early adulthood: a birth cohort study. 胎児期のアルコール暴露で青年期のアルコール関連疾患が予測できるか?	
執筆者	
Alati R, Al Mamun A, Williams GM, O'Callaghan M, Najman JM, Bor W.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Arch Gen Psychiatry. 2006 Sep;63(9):1009-16.	
キーワード	
オーストラリア、胎児、アルコール暴露、青年期、アルコール関連疾患	
要 旨	
背景： 胎児期のアルコール曝露と成人早期におけるアルコール性障害の発症の関連はほとんど知られていない。	
目的・方法： MUSP (Mater-university of Queensland study of pregnancy and its outcomes, 妊娠とその影響についてのクィーンランドマター大学研究、1981年に企画) の参加者から 2138 人を対象に妊娠早期及び後期の妊婦のアルコール摂取と子供のアルコール障害発症時期との関係を 21 年間追跡した。母親と子供は子供の誕生時、6 ヶ月時、5 歳時、14 歳時、21 歳時に追跡調査を受けた。成人早期のアルコール障害発症は 21 歳時に the Composite International Diagnostic Interview-コンピューター版を用いて評価した。関連は子供の性、母親の喫煙、出生体重、在胎週数、母親の教育歴、母親の婚姻状況、妊婦健診受診、母親の不安感、うつ、及び 14 歳時点での子供の行動様式で調整した。	
結果： 妊娠中に一機会 3 グラス (約アルコール 10g、1/2 合) 以上母親が飲酒することは子供のアルコール障害発症と関連していた。子供が早期 (13-17 歳) アルコール性疾患を発症する率は母親が非飲酒の場合と比較して妊娠早期 (平均、妊娠 18 週目) に 3 glass 以上飲んでいていた群で 2.95 倍 (95%信頼区間: 1.62-5.36)、妊娠後期 (出産 3 ヶ月前) に 3 glass 以上飲んでいていた群で 1.35 倍 (95%信頼区間: 0.69-5.36) と高かった。妊娠早期の飲酒と子供のアルコール障害後期発症 (18-21 歳で発症) の関連も強く、非飲酒の母親の場合と比べ妊娠早期に 3 glass 以上飲んでいていた群で 3.29 倍 (95%信頼区間: 1.74-6.24) であった。	
結論： さまざまな要因、特に出産後の喫煙や飲酒状況で調整しても妊娠時の飲酒と子供のアルコール性障害の関連は認められた。これはアルコール障害に生物学的な要因が存在することを支持する結果であった。この関連を説明するメカニズム探索が必要である。	